

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22014

研究課題名（和文）高度成長期の地域における住民運動と歴史意識

研究課題名（英文）Resident Movements and Historical Awareness in Areas in the Period of Rapid Growth

研究代表者

高田 雅士（TAKADA, Masashi）

一橋大学・大学院社会学研究科・研究補助員

研究者番号：00876261

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高度成長期の歴史や文化をめぐる住民運動に即して、地域社会の変容とそのなかで顕在化する人びとの歴史意識について明らかにした。具体的には、京都府南山城地域をフィールドとし、1973年に城陽市で「緑と教育と文化財を守る会」が結成されるに至るまでの同地域における文化財をめぐる住民運動を対象としている。そうした検討によって、高度成長期という時代に、地域に生きる人びとがどのような課題に直面していたのか、さらに住民運動をおしてそうした課題を克服しようとした際、人びとは地域の歴史とどのように向き合ったのかの解明を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、高度成長期の住民運動をめぐる研究が活性化しており、そこでは地域の「開発」に対抗する住民運動が注目され、検討が深められてきた。しかし、「開発」は地域の歴史や文化をも破壊するものであったという点については思いのほか見過ごされてきた。「開発」によって文化財が破壊されようとする際、その地域に生きる人びとは文化財やその背景に存在する地域の歴史とどのように向き合おうとしたのか。そのような住民運動の担い手の歴史意識に注目し、具体的な地域に即して明らかにした点が、これまでの研究にはみられない本研究の学術的意義および社会的意義といえる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I clarified the transformation of the local community and the people's historical consciousness that became apparent in the course of the residents' movement over the history and culture of the high-growth period. Specifically, the Minamiyamashiro area of Kyoto Prefecture is the field, and the resident movement over cultural properties in the area until the formation of the "Greenery, Education and Cultural Property Preservation Association" in Joyo City in 1973.

Through this study, we learned what kind of challenges the people living in the region faced during the period of rapid economic growth, and how they dealt with the history of the region when they tried to overcome those challenges through resident movements. I tried to elucidate whether I faced.

研究分野：日本現代史

キーワード：日本現代史 地域史 史学史 住民運動 文化財保存運動

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで1950年代前半の文化運動について研究を進めてきた。しかしそうした研究では、1950年代前半の独自性を強調するあまり、前後の時代との関連のなかでその固有性を掴みきれないという課題が残されていた。そのため、今後は、1950年代前半に展開された文化運動のその後(高度成長期)のゆくえをたどることによって、こうした課題の克服を目指す必要があると考えるに至った。

高度成長期の文化運動団体に注目した従来の先行研究では、「大衆社会」化ないし「大衆文化状況」の到来によって、運動は次第に衰退していくとの見解が通説的となっている(高岡裕之「高度成長と文化運動」大門正克ほか編『高度成長の時代』3巻、大月書店、2011年)。たしかに、ひとつの団体の盛衰を軸に考えれば、高度成長による「大衆社会」化の大きな影響力を認めることになるだろう。

しかし、1950年代前半の文化運動の担い手に注目してみると、また異なる側面がみえてくる。たとえば、三重の澤井余志郎や熱海の甲田寿彦のように、1950年代前半の文化運動の重要な担い手は、高度成長期になると公害問題などをはじめとする住民運動の中心的存在となっていく。安田常雄も指摘しているように、高度成長期のそれぞれの「現場」の運動は住民自らの自己学習運動として展開され、その根底には生活記録運動やサークル運動などの戦後日本の民衆文化運動の継承があったのである(安田常雄「思想の言葉 「1968年」は民衆生活(思想)とどのように交錯するか」『思想』1129号、2018年5月)。

つまり、1950年代前半に隆盛した文化運動は高度成長期に衰退していった一方、そのなかで深められた自己学習運動的側面は、のちの住民運動へと引き継がれていったと考える必要があるのではないか。高度成長期の住民運動の内実について検討を進めることで、これまでの研究の課題を克服できると考えるようになったのが、本研究の開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

以上の背景を前提として、本研究は高度成長期の歴史や文化をめぐる住民運動に即して、地域社会の変容とそのなかで顕在化する人びとの歴史意識について明らかにすることを目的としていた。

高度成長期には、三里塚闘争、横浜新貨物線反対運動、公害被害者運動など、地域に生きる人びとが自らの生活の課題の克服を試みようとする住民運動が数多く展開された。そして、運動のなかで紡がれたさまざまな思想は、現在の私たちの暮らしに大きな影響を与えてもいる。つまり、地域における住民運動のあり方を歴史的に考えることは、国家と地域の関係性が大きく問われている現在、きわめて重要な意義を有している。

そのうえで本研究では、地域住民を主体とした歴史や文化をめぐる住民運動、具体的には文化財保存運動に注目した。この点に、これまでの高度成長期の住民運動を対象とした研究にはない本研究の新規性や独創性がある。従来の研究では、地域の「開発」に対抗する住民運動が目ざされ、検討が深められてきた。しかし、「開発」は地域の歴史や文化をも破壊するものであったという点については思いのほか見過ごされている。「開発」によって文化財が破壊されようとする際、その地域に生きる人びとは文化財やその背景に存在する地域の歴史とどのように向き合おうとしたのか。そのような住民運動の担い手の歴史意識に注目する点が、これまでの研究にはみられない本研究のオリジナリティである。

さらに重要なのは、そうした地域における歴史や文化をめぐる住民運動に、多くの歴史研究者も地域住民の一人として関与していたということである。同時代を生きた歴史研究者の存在をも歴史的な検討の俎上に載せることによって、史学史としても重要な貢献が予想される。この点に本研究のさらなる意義がある。

以上の課題を前提として本研究で対象としたのは、これまで研究代表者がフィールドとしてきた京都府南山城地域における住民運動である。具体的には、「緑と教育と文化財を守る会」(現・「城陽の緑と文化財を守る会」)が1973年に結成されるに至るまでの、京都府城陽市における文化財をめぐる住民運動を対象とした。高度成長期の城陽市は、京都中心部の加速度的な膨張によって次第にベッドタウンとしての役割を担っていくようになった。宅地開発によって多くの「よそ者」が地域に流入したことにより、新住民と地元住民との新たな関係性が生み出されることになる。こうした地域の変容を背景としながら、城陽市では歴史研究者との協働によって、文化財保存運動などの住民運動が活発に展開されることとなった。歴史をとともに学ぶことをとおして、新たな地域コミュニティの創出が目指されたのである。

こうした検討によって、高度成長期という時代に、地域に生きる人びとがどのような課題に直面していたのか、さらに住民運動をとおしてそうした課題を克服しようとした際、人びとは地域の歴史とどのように向き合ったのかを明らかにすることが本研究の目的であった。文化財保護法の「改正」から数年が経過するなかで、文化財と地域住民との関係をあらためて歴史的に検証していくことも求められている。そうした現在の視点からも、本研究は重要な意義を有している。

### 3. 研究の方法

研究代表者はこれまで聞き取り（オーラルヒストリー）を重要な研究の方法として位置づけ、実践を積み重ねてきたが、本研究でもその方法を積極的に活かしていくことを目指していた。また、聞き取りをとおした個人所蔵資料の発掘もあわせて課題としていた。高度成長期の住民運動に関する資料は、近年、収集・保存・公開や資料集の刊行が進められているが、それでもそれらはいまだ一部の事例に偏っている。現代史研究の特徴は、いまだ関係者が生存している点にあり、聞き取りは重要な研究上の方法として位置づけられる。

しかし、研究開始と同時に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、聞き取りの実施とそれにとまなう資料の発掘を満足に進めることができなかつたのが心残りである。とはいえ、「4. 研究成果」でも言及するように、「城陽の緑と文化財を守る会」の関係者の一部から聞き取りを実施することができたのは重要な成果である。

### 4. 研究成果

本研究では、具体的に以下の成果を得ることができた。

第一に、「城陽の緑と文化財を守る会」の関係者から聞き取りを実施することができた。関係者からは、「緑と教育と文化財を守る会」以来の活動内容をはじめ、現在進めている取り組みなど、多岐にわたるお話を伺うことができた。また、同会の活動に長く携わった人びとが、その経験を現在の活動にどのように活かしているのかについても理解を深めることができた。さらに、研究期間内に実施した聞き取りの経験は、大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会での報告「歴史のなかの声を「残すこと」 安岡健一氏のオーラルヒストリー論をめぐって」(オンライン開催、2023年3月30日)の内容の一部活かすことができた。

第二に、京都府立京都学・歴史館、および城陽市歴史民俗資料館での史料調査をおこなうことができた。なかでも、京都府立京都学・歴史館においては、城陽団地自治会による住民運動に関する史料を収集することができた。財団法人日本労働者住宅協会の事業として建設された城陽団地では、自治会を中心に山砂利公害反対運動や保育所づくり運動、そして新しい小学校の建設を目指す運動などが展開された。同地域での文化財保存運動の盛り上がりの背景には、そうした城陽団地を中心とする住民運動の成果が存在していたことを収集した史料群から明らかにすることができた。

第三に、上記の内容をふまえたうえで、「こども風土記論 が切り拓くもの」(京都大学人文科学研究所編『人文学報』117号、2021年)を執筆することができた。これは、菊地暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ』『北白川こども風土記』から(小さ子社、2020年)の書評原稿ではあるが、そのなかで、『北白川こども風土記』と1979年に刊行された『南山城子ども風土記』(文理閣)を比較検討することにより、こども風土記論 が有する可能性について議論を深めることができた。具体的には、『南山城子ども風土記』に収録された子どもたちの作文が、高度成長期以降の南山城地域の動向をどのように反映しているのかについて、地域開発やそれにとまなう文化財保存運動の展開に即しながら検討を加えた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高田 雅士	4. 巻 244
2. 論文標題 国民的歴史学運動研究の課題と展望 『戦後日本の文化運動と歴史叙述』をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 61～72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田 雅士	4. 巻 15
2. 論文標題 書評：赤澤史朗著『戦中・戦後文化論 転換期日本の文化統合』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 同時代史研究	6. 最初と最後の頁 71～76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田 雅士	4. 巻 866
2. 論文標題 文献紹介：宇野田尚哉・坪井秀人編著『對抗文化史 冷戦期日本の表現と運動』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 111～111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田 雅士	4. 巻 117
2. 論文標題 こども風土記論 が切り拓くもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 159～166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/264292	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高田雅士	4. 巻 847
2. 論文標題 「党員歴史家の当面の任務」と国民的歴史学運動研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 30-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田雅士	4. 巻 225
2. 論文標題 書評：鬼嶋淳著『戦後日本の地域形成と社会運動 生活・医療・政治』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人民の歴史学	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高田 雅士
2. 発表標題 歴史のなかの 声 を「残すこと」 安岡健一氏のオーラルヒストリー論をめぐって
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------